

自主的自立的な価値観形成をめざす小学校人物学習の改善

—第4学年小単元「芋代官-井戸平左衛門の政治は正しかったのか」の開発を事例として—

紙田 路子

岡山理科大学教育学部初等教育学科

(2018年10月17日受付、2018年12月6日受理)

I. はじめに

自主的自立的な価値観形成、態度形成が、民主主義社会における社会科教育には必要であることは従来から主張されてきている。本研究は、人物に対する評価を吟味・分析することで子どもの自立的な価値観形成をうながす小学校社会科授業の改善を図ろうとするものである。

民主主義社会における市民には、一方的な価値の注入に対抗し、主体的に意思決定を行うことのできる知識や能力、意欲が必要とされる。近年では、このような市民的資質の育成を目的として、子どもの自主的自立的な価値観形成をめざす社会科授業が提案されるようになった。これらの社会科授業においては、価値判断基準のより精緻な検討や異なる判断基準との比較を通して、無自覚に保持している仮説的な価値を相対化し、吟味させていくことが授業の核となっている。

しかしながら、小学校社会科授業においては、一つの「正しい」態度を身に付けさせるために、事実を特定の視点からのみとらえさせようとする授業が、依然として展開されている。小学校中学年段階において広く行われている、「地域の発展に尽くした人物」を教材とする社会科授業はこの典型である。これらの授業においては地域の発展に尽くした人物の業績を共感的にとらえさせることで、結果的に、「開発はよいこと」であり、「地域の発展のために尽くさなければならない」というようにひとつの価値やとるべき行動を教え込むことになっている。

しかしながら、本研究は価値学習を行う上で、人物学習が不適切である、と主張するものではない。具体的な事象を通して社会認識形成を行っていく小学校段階において、人物という具体的な事物を教材とする社会科授業は有効であると考えられるからである。人物学習を通して自立的な価値観形成を保障するには、人物に対する一方的な見方を排した上で、複数の見方・考え方を提示し吟味・分析することが必要ではないか。このような考えに立ち、本研究では、人物に対する複数の評価を対象化し、そこに内包される価値を分析・吟味することで、自主的自立的な価値観形成を目指す小学校社会科学学習の構築を検討する。

II. 歴史学習における価値観形成の原理

自立的な価値観形成を目的とした人物学習を設計する際、服部一秀のザクセン州キムナジウムの歴史科の分析(服部, 2012)と溝口和宏の「開かれた価値観形成の論理」の研究(溝口, 2002, 2012)は示唆に富むものである。

ザクセン州キムナジウムの歴史科は、過去の社会を省みることで現在の社会を見つめ直し、問い直す社会探究の能力育成(歴史的社会探究力)を意図して、カリキュラムが構成されている。その中で大きな意義を持つのが、歴史文化探究力である。歴史的社会探究力を内から強化する力としての歴史文化探究力とは、過去をめぐる社会の営みの様相や立場、構成や作用、すなわち過去についての「語り」を、通時的対比において分析・検討する能力である。過去をめぐる社会の営み(記念碑や史料、神話等)を分析・吟味することで、当該社会のものの見方、考え方を相対化する能力といえよう。ザクセン州の歴史科においては、直接的に価値観形成が意識されているわけではない。しかし、当該社会の価値を相対的にとらえ、分析・吟味する通時的な社会分析の手法は、社会的事象の評価を通して、その背後にある価値を相対化する授業の指針となるものである。

溝口は、価値判断基準のより精緻な検討や、異なる基準の対比により、個々の価値観を漸進的に形成させることができるとし、歴史教育における開かれた価値観形成の方略を示している。それが「相対化による成長」と「争点の考察による成長」である。社会編成の基盤となる多様な原理の対立を視점에歴史を読み解くことにより、子どもたちが暫定的に保持する価値的知識を検証し、漸進的に成長させようとするものである。

過去をめぐる社会の営み、すなわち過去についての語りを分析することで、当該社会の価値を相対化するザクセン州キムナジウムの歴史科の歴史的社会探究力育成の論理と、当たり前ととらえがちな既存の社会の背後にある価値を相対化し、他の判断基準と対比・分析・吟味することで価値観を成長させようとする溝口の開かれた価値観形成の方略は、自立的自主的価値観形成をめざす社会科授業構成にとって、示唆に富む

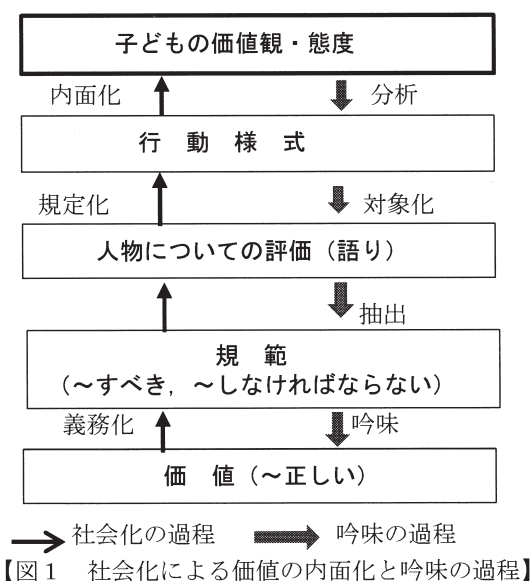
ものである。しかしながら、これらの授業はいずれも中等・高等教育を対象としたものであり、小学校社会科学では具体化されていない。

そこで本研究では、「人物学習」において、過去の人物の業績に対する評価の違いとその背後にある価値を対象化し、吟味することで、子どもの自主的自立的な価値観形成を保障する小学校人物学習を設計することを試みる。

Ⅲ 評価の分析・吟味による価値観形成の原理

1. 小学校における価値観形成の原理

一つの「正しい」態度を身につけさせようとする一方的な社会化に対抗し、批判的な視点を持つことのできる価値観を形成するには、社会が子どもに内面化させようとする価値を一旦対象化して、吟味することが必要となる。価値は、その社会において確立されている多様な「制度」や「語り」の中に見出すことができる。図1は社会化による子どもの価値観形成の過程を示したものである。



ある一定の価値が社会に受容されると、その価値は社会成員に対して、「～すべきである」という義務を課すようになる。これが規範である。「制度」や「語り」を通して規範は行動様式として具体化され、子どもに一定の価値や態度を教え込むことになる。しかしながら、子どもを一定に方向に価値づけようとする規範を一旦対象化し、その価値を吟味することで、子どもは自主的自立的な価値観を形成することが可能となる。意思決定能力の育成を目的として、人物の政策評価を行う授業実践はこれまでも行われてきたが、その多く

は子ども自身にその評価を行わせるものであった。例えば小原友行は、開国に関わる老中阿部正弘の意思決定を教材化し、経済、外交、安全保障といった側面を考慮した上で、政策評価させる授業を提案している（小原友行，1987）。しかし評価の背後にある価値を対象化し、吟味できなければ、子どもの自立的な価値観形成を保障することは難しい。先に述べた従来の人物学習の問題点を克服するには、子ども自身が人物を評価する学習ではなく、子どもを一定の方向に価値づけようとする、評価そのものを対象化する授業が必要ではないか。

これらの分析を踏まえ、次の2点を人物学習における価値観形成の方略とした。

- A 人物の政策の評価の比較・分析による価値判断の相対化とその反省・吟味
- B 政策の分析・評価による自己の価値判断の吟味・修正

人物の政策についての評価の比較・分析・吟味を行うのがAである。従来の小学校人物学習においては、地域に残る石碑や記念碑、伝統芸能等に着目し、それらがつくられ、伝承されてきた意味を探求することで、人物の偉業を認識する学習が行われてきた。そこで取り上げられる人物は、「地域の発展のために尽くした人物」である。石碑や記念碑などの史跡は、人物の施策や政策に対するひとつの評価を示すものであり、それを無批判的に受け入れることは、価値を閉ざすことになる。そこで、政策に対する異なる評価を認識させることで、その背後にある価値判断を相対化し、批判的に吟味させる。

Bは、Aで確立した自己の価値判断基準をもとに他の事例を、評価をする過程を通して、価値判断の修正、再構成を行うものである。他の社会問題について価値判断することで、自らの価値判断基準を、自由や平等、正義といった民主的価値により適うものへと、成長させていくことがねらいとなる。

2. 授業構成原理

1のA、Bを踏まえ、価値観形成をめざす小学校人物学習を、人物の政策の背後にある価値を比較・分析・吟味する「政策の評価の吟味過程」と、自らの価値判断を修正、再構築する「価値判断の吟味過程」から構成した。

(1) 人物の政策の評価の吟味過程

「人物の政策の評価の吟味過程」は、人物の政策についての評価の比較・分析を通してその背後にある価値判断を対象化する過程である。A-①「人物に関わる

課題の設定」A-②「人物の政策に関わる事実認識」A-③「人物の政策の評価の相対化」A-④「人物の政策の評価の吟味」の4つの段階で構成される。

A-①「人物に関わる課題の設定」は、人物に対する評価をもとに、人物の政策・業績についての課題を設定する段階である。評価が具現化したものとして、石碑や記念碑、祭り等を取り上げる。古くから残るこれらの歴史的遺物に触れることで、子どもは、「この人物はなぜ、地域の多くの人々に慕われているのだろう」と疑問を抱くであろう。A-②「人物の政策に関わる事実認識」は、A-①の評価をもとに、人物の政策・業績についての事実認識を行う段階である。評価の理由を分析する段階であるので、その事実認識は特定の価値観に支えられたものである。それとは異なる価値観に基づく事実認識を行うのが、A-③「人物の政策の評価の相対化」である。この段階では、人物の政策についてA-①とは異なる評価をとりあげ、「なぜそのように評価されたのか」、政策に関わる事実についての再吟味を行う。その上で、評価が異なれば、政策についての事実認識も異なってくることに気づかせる。A-④「人物の政策の評価の吟味」は、人物の政策評価の背後にある価値観について吟味する段階である。評価の背後にある価値判断基準を明らかにし、吟味した上で当該人物についての評価を、子ども自身が下すものである。

特定の人物の政策評価に基づく事実の確認から、その背後にある価値に気づき、吟味する過程を経ることで、子どもは、根拠とする価値によって人物の見方が異なってくることを理解するであろう。

(2) 価値判断の吟味過程

「価値判断の吟味過程」は、「人物の政策の評価の吟味過程」で形成した自己の価値判断基準を、他の社会問題の価値判断を通して、修正する段階である。何を「よいこと」とするかという価値判断基準は、判断基準のより精緻な検討や異なる基準との対比により、成長させることが可能である。この段階は、既存の価値判断基準では、判断を下すことが難しい社会問題を判断させることによって、子どもの価値判断基準をより民主的価値に適うものへと成長させようとするものである。それは、B-①「社会問題についての事実認識」、B-②「社会問題についての分析・評価」、B-③「他者の分析との比較による判断基準の再調整」、B-④「最終的な価値判断」の四段階となる。

B-①「社会問題についての事実認識」段階は、問題となっている社会状況についての事実確認を行う段階である。B-②「社会問題についての評価」の段階は、B-①で示された社会問題に関わる判断について、評価させるものである。B-③「他者の分析との比較による評価の再調整」の段階では、クラスの他の子どもの評

価と比較し、価値判断基準を吟味・調整していくことで、自分の価値判断基準を修正、再構成する。以上の段階を経て、最後にB-④で最終的な価値判断を行うのである。

人物が行った政策についての評価を比較・分析・吟味し、価値判断基準を形成した上で、現代の社会問題に関わる判断について評価させる。また、自己の評価をクラスの他の子どもと比較し、吟味していくことで、価値判断基準をより精緻化していくことができるものとする。さらに、この段階においては過去の社会を省みることで、現在の社会を見つめ直し、問い直すこともできると考える。

IV. 小学校第4学年「芋代官－井戸平左衛門の政治は正しかったのか？」の単元開発

1. 単元設定の理由

前述した子どもの価値観形成をめざす人物学習の原理を鑑みて、教材としてふさわしい歴史的人物とは、以下の条件を満たすものであろう。

- ・史跡や行事などを通してその業績が現在も伝えられている。
- ・業績の評価が分かれている。
- ・評価の基盤をなす価値観が、現在の社会を分析する際にも用いることができる。

この条件を満たす歴史的人物として、本研究では、島根県石見地方で「芋代官」として名高い、井戸平左衛門を取り上げる。

井戸平左衛門は、60歳にして天領である石見銀山領の代官となった人物である。その死後は平左衛門の功績を頌える碑が各地に建てられた。また、200年以上たった今でも石見の国の町や村では追善法要が営まれ、平左衛門は根強い人気を保っている。そのように人々の記憶に残る理由は、彼が代官として石見銀山領で行った施策による。全国的な大飢饉が席卷するなか、平左衛門は米蔵の開放、年貢の減免、サツマイモの栽培の普及・促進等の施策を行い、多くの領民を餓死から救った。しかしながら、477基を超える頌徳碑は、井戸平左衛門の死後100年以上も経った、江戸後期から明治初頭にかけて建てられたものがほとんどである。つまり、現代に残る平左衛門の評価は、変遷する社会状況の中で、人々の語りを通して構成されてきたものだと言うこともできる。井戸平左衛門の政策が行われた当初において、同様の評価がなされていたとは断言できない。実際に平左衛門はわずか2年間で代官をやめさせられ、備中笠岡の陣屋に送られたとされる説も

ある。(代官として赴任した当時からすでに病気で、2年間の激務の結果、病気が悪化したため代官の職を引いたという説もある)「幕藩体制」という江戸幕府のシステムからみたと、幕府のおきてを破って官倉を開き、税の減免をしたという平左衛門の独断的な政策が違法行為としてとらえられたためであろう。

井戸平左衛門の政策をめぐる、これらの評価の背後にある価値を分析・吟味することは、子どもへの一方的な価値注入を排し、子どもの自立的な価値観形成を保障するであろう。さらには「人命の優先か、きまりの優先か」という価値判断は現代の社会問題の分析にもつながるものである。

2. 単元の到達目標

単元設定の理由をふまえて、第4学年単元「芋代官—井戸平左衛門の政治は正しかったのか」の「政策の評価の吟味」と「価値判断の吟味」の到達目標を図2に示した。

「政策の評価の吟味」に関する到達目標は、政策の評価の判断構造をとらえることである。具体的には、「正しい」とする判断は、「地域の政治は、そこに住む人々の生命や生活を重視して行うべきである」という価値と、それを裏付ける事実から構成される。一方、「幕府の役人である平左衛門が幕府のきまりを守らなかったのは不正である」という判断は、「政治は、個別の状況に左右されることなく、決められたルールに従って行うべきである」という価値と、それを裏付ける事実から構成される。このように判断を根拠づける価値のちがいに気付かせることがねらいとなる。

「価値判断の吟味」についての到達目標は、2005年8月、アメリカのニューオーリンズ市に壊滅的な被害を与えたハリケーン・カトリーナに関わる判断の是非(堤未果, 2008)について、事実認識と事実についての価値的言明から構成するものである。「(救援要請があったにもかかわらず救援行動をとらなかった)、地元救援部隊の行動は間違っていた」とする判断は、「被害を受けたのはニューオーリンズの人たちだけなので、彼らを助けることは一部を優先することにはならない。だからきまりを破ることになっても助けるべきだった。(一部を優先するのでなければ人命を重視すべき)」という人命重視の考えに基づく。「正しかった」という判断は、「井戸平左衛門の場合は幕府からの指示が届くまでに時間がかかったため現場で判断する必要があったが、今は情報がすぐに届くので、指示に違反することに正統性はない。(状況把握や情報伝達のシステムが整っている場合は命令に従うべき)」という考えを根拠とする。

このように井戸平左衛門の政策評価で確立した価値判断基準を、事実に基づいて修正、再構成することが

この学習過程の目標となる。

3. 単元構成

第4学年小単元「芋代官—井戸平左衛門の政治について考える」の教授書を、後述する表1に示した。第1次から3次は「政策の評価の吟味過程」、4次は「価値判断の吟味過程」である。

(1) 第1次 井戸平左衛門について知ろう

「なぜ井戸平左衛門は多くの人々から慕われているのだろうか」

第1次はA-①「人物に関わる課題の設定」にあたる。現在に残る人物についての評価から、人物の政策についての課題設定を行う段階である。

石見地方の代官、井戸平左衛門の死後、彼の功績を頌える碑が、旧石見銀山領を中心に477箇所も建てられた。また石見銀山領の代官所の所在地である大森町には、井戸神社が明治12年に建てられたが、代官を神に祀るという事例は全国ではみられない。なぜ、井戸平左衛門は、このように今でも石見地方の人々の心に残り、慕われているのか。平左衛門の人となりや代官としての施策を通してその理由を追求していく。

(2) 第2次 井戸平左衛門の政治について考える①
「井戸平左衛門のしたことは、石見銀山領の人々にどのような影響をもたらしたのだろうか」

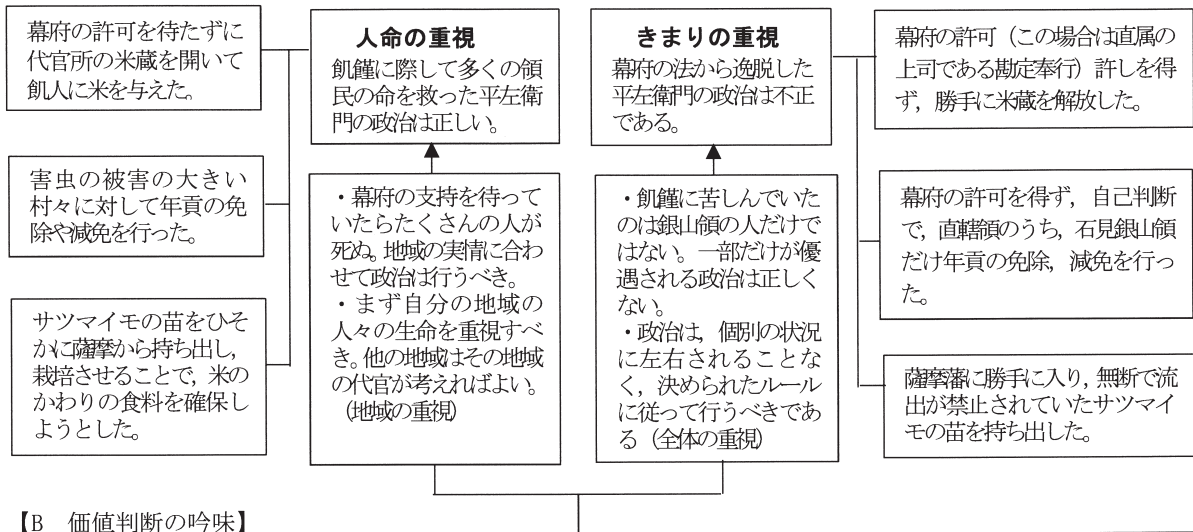
第2次はA-②「人物の政策に関わる事実認識」の段階である。A-①で設定した課題をもとに、多様な資料から人物の政策と、それらが人々に与えた影響を考察していく。井戸平左衛門は「代官所の米蔵の開放」「年貢の免除・減免」「サツマイモの栽培の普及」など、飢饉に苦しむ人々のために、さまざまな施策をとった。その施策は、飢饉に苦しむ石見銀山領の多くの人々の命を救うことになった。第2次では平左衛門の政策を調べることを通して、現在に伝わる評価の根拠となる事実を確定していく。

(3) 第3次 井戸平左衛門の政治について考える②
「井戸平左衛門の政治はどのように評価されるか」

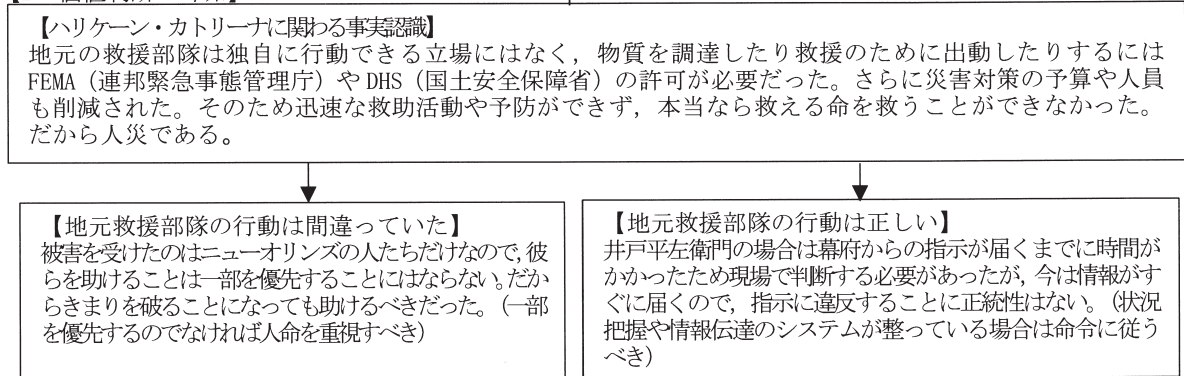
第3次はA-③「人物の政策の評価の相対化」にあたる。第2次で明らかにした井戸平左衛門の政策に対する評価とは相反する評価を取り上げ、その理由について明らかにすることで、既存の評価を相対的にとらえることができるようにする。またその背後にある価値を吟味することで、自己の価値判断基準の確立を目指す。

井戸平左衛門の施策が飢饉による餓死を防いだけでなく、サツマイモ栽培の普及を通して食料供給を安定させたこと、政治の安定は銀産出量の増加にもつながったことを確認した上で、平左衛門が幕府の命により代官をやめさせられ、備中笠岡の陣屋に送られた事

【A 政策の評価の吟味】



【B 価値判断の吟味】



【図2 第4学年単元「芋代官 - 井戸平左衛門の政治から考える」の到達目標】

実をとらえ、その理由を追求する。資料の読み取りを通して、勘定奉行の配下にある平左衛門が、幕府の許可を得ず勝手に米倉を開いたり、年貢の減免・免除を行ったりしたことは、幕府の法に反する行為であること、また無断でサツマイモの苗を薩摩藩から持ち出した行為も、違法行為であったことをとらえる。その上で、「井戸平左衛門の評価がこのように異なるのはなぜか」と問うことで、評価の背後にある価値を明らかにする。さらに、当時の社会状況をもとに「人命かきまりか」という価値を比較衡量することで、「どのような場合に人命が優先され、どのような場合にきまりが優先されるか」についての判断基準を形成する。

(4) 〈第4次〉ハリケーン・カトリーナから考える「なぜニューオリンズ市では多くの死者が出たのだろう」

第4次は「価値判断の評価過程」にあたる。

現代の社会問題についての事実認識を行った後、「正しかったのか否か」判断する。さらに他者の判断と比較することによって自己の判断を再吟味し、最終的に

判断を下す。

第4次の教材となる社会問題は、アメリカ・メキシコ湾岸を襲ったハリケーン・カトリーナの対策をめぐる問題である。「なぜハリケーン・カトリーナの被害を人災と言うのか」と問うことで、カトリーナの被害を拡大させた当時の救援対策の状況について認識する。その上で、「地元からの救援要請があったにも関わらず、上からの指示がなかったため救援行動をとらなかった地元の救援部隊の行動は、正しかったのか間違っていたのか」判断する。ハリケーン・カトリーナについての事実認識と「政策の評価の吟味過程」で形成した価値判断基準をもとに、評価を下す。さらには自己の評価と他者のそれを比較し、吟味することで自己の価値判断基準を修正、再構成する。

「人命かきまりか」という対立軸は、現代の社会問題にもつながる価値ではあるが、井戸平左衛門の政策評価で形成した判断基準を、そのまま現代の論争問題の判断にあてはめることはむずかしい。過去と現在では、政策をめぐる社会状況が大きく異なるからである。

表1 「芋代官—井戸平左衛門の政治から考える」教授書（第1次は省略）

第2次 井戸平左衛門の政治について考える①「井戸平左衛門のしたことは、石見銀山領の人々にどのような影響をもたらしただろうか」

	発問	資料	児童の予想される発言と獲得する知識
A ② 歴史的人物の政策に関わる事実認識	○井戸平左衛門は石見地方の代官となってどのような政治を行ったのだろうか。	授業資料⑥ 「井戸平左衛門の政策」	<ul style="list-style-type: none"> 自分の財産や裕福な農民から募ったお金を資金として米を購入して、石見の人々に配った。 幕府の許可を待たないで代官所の米倉を開いて人々に米を分け与えた。 年貢については害虫の被害が著しい海辺部の鳥井村（大田市）や黒松村（江津市）などの地域では、その年の年貢米を「此の取米なし」として免除にした。 酒谷村（邑智町）や井田村（温泉津町）などの比較的被害の小さい村では年貢を減免した。
	・平左衛門はどうして「芋代官」といわれるのだろうか。「芋代官」と呼ばれる理由を調べてみよう。	授業資料⑦ 「サツマイモの栽培」 授業資料⑧ 「銀山ものがたり」	<ul style="list-style-type: none"> サツマイモの栽培は他の作物と比較して労力もいらず、たくさん収穫でき、しかも肥料も少なくすむことから土地のやせた石見に適していた。 サツマイモは当時薩摩国以外への持ち出しは禁止されていたが、伊達金三郎に命じて芋の苗を持ち帰らせた。 苦労の末持ち帰った芋の苗の栽培はことごとく失敗した。 松浦与兵衛が芋の栽培に成功し、それを種芋として栽培したため、芋の栽培が広がった。 井戸平左衛門はサツマイモの苗を持ち帰り、サツマイモの栽培を普及させたために「芋代官」と呼ばれるようになった。 米の配給やサツマイモの普及により、石見銀山領では餓死する人がいなかった。 日照りに強く、砂浜でも育ち、年貢がかからないサツマイモは隠岐に広がり、鳥取に広がり、山口・広島・岡山に広がった。
	○井戸平左衛門の政治はどのように評価されているのだろうか。 ○このように多くの人々を救った平左衛門だが、わずか2年で代官をやめている。なぜだろうか？	授業資料⑨ 「井戸平左衛門の頌徳碑」 授業資料⑩ 「島根県内の井戸平左衛門の頌徳碑」	<ul style="list-style-type: none"> 井戸平左衛門の功績を称える碑が477基も建てられている。 飢饉に際して多くの領民の命を救った井戸平左衛門の政治は正しいと評価されている（A-②） 病気になった代官をやめたのではないだろうか。 高齢のためなくなったのではないか。 その手腕を認められて別の地方の代官になったのではないか。 幕府のきまりを破ったので罰せられたのではないか。

第3次 井戸平左衛門の政治について考える②「井戸平左衛門の政治はどのように評価されるか」

	発問	資料	児童の予想される発言と獲得する知識
A ③ 歴史的人物の政策の評価の相対化	○井戸平左衛門は幕府の命により代官をやめさせられ備中笠岡の陣屋に送られたとされている。なぜ平左衛門は幕府に罰せられなければならないかなかったのだろうか ・平左衛門はなぜ罰せられたのだろうか。まとめてみよう。	授業資料⑤ 「井戸平左衛門の政策」 授業資料⑦ 「サツマイモの栽培」 授業資料⑧ 「幕府におさめられた年貢」	<ul style="list-style-type: none"> 平左衛門は代官である。上司である勘定奉行の命令に従わなければならない立場である。 幕府の許可を待たないで代官所の米倉を開いて人々に米を分け与えたから、幕府のきまりを破った罪で罰せられた。 平左衛門が年貢の減免をしたために、年貢米が前の年に比べて4分の3以上も減ったため、幕府に罰せられた。 薩摩国以外の持ち出しを禁止されているサツマイモをかってに持ち出したから罰せられた 幕府の役人である井戸平左衛門が幕府のきまりに従わなかったのは不正行為であるので罰せられた。（A-③）

	発問	資料	児童の予想される発言と獲得する知識
A ③ 歴史的人物の政策の評価の相対化	<p>○このように井戸平左衛門の政治については、「正しい」とする判断と「間違っている」という判断がある。なぜ評価が異なるのだろうか。</p> <p>○井戸平左衛門の政治について自分の考えを述べよう。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・「正しい」と評価する側は、平左衛門が幕府のきまりを破っても、たくさんの人々を救ったこと、地域の人々が餓死しないように、いろいろな努力をしたこと、自分を犠牲にしても人々を助けようとしたことを評価している。つまり何よりも人の命を優先したから正しいと判断している。 ・「間違っている」と評価する側は、幕府の役人である平左衛門は幕府のきまりに従わなければならないこと、薩摩藩も事情があって、サツマイモを持ち出すことを禁止していたのに、話し合いもせず勝手に持ち出したことは不正であること、飢饉に苦しんでいたのは石見地方の人々だけではないのに石見地方の人々だけ優遇されるのはよくないこと根拠に判断している。(A-④) つまり、きまりを破ったことと自分の地域の住民だけをたすける行為であったことから「間違っている」と評価している。 ・きまりは人の命を守るためにある。人の命よりきまりを優先するのはおかしい ・人の命を助けることは大切だが、一部の命だけでなく、全員の命を助けなくてはならない。そのためにきまりがあるのではないか。 ・平左衛門の政治は石見地方の人からみればよい政治だか、ほかの地方の人からみれば、正しくないのかもしれない。

第4次 第4次 ハリケーン・カトリーナから考える

	発問	資料	児童の予想される発言と獲得する知識
B 価値判断の吟味	<p>○2005年8月、アメリカにカトリーナというハリケーンが上陸し1000人以上の人が亡くなった。連邦緊急事態管理庁(FEMA)の元職員であるジェフリーアンダーソンは「これは自然災害ではなく人災(人がもたらした災害だ)と言っている。これはどうということだろうか。</p> <p>・FEMAの承認がないために、ハリケーン被災地住民から支援要請があっても救援活動を行わなかった地元救援部隊の行動は正しかったと思いますか。間違っていたと思いますか。</p> <p>○互いの意見を聞いて考えたことを発表しよう。</p> <p>○最終的に考えたことを書こう。</p>	<p>授業資料⑨ 「ハリケーン・カトリーナ」</p> <p>授業資料⑩ 「FEMAの民営化」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・カトリーナがルイジアナ州に上陸した日の午後、FEMA(連邦緊急事態管理庁)のマイケル・ブラウン長官は「すべての消防その他救急救援組織は、ハリケーン被災地で、FEMAによって申請・承認されないかぎり、独自の緊急救援活動をしてはならない。」と声明を発表した。 ・この決定の結果として、ハリケーン被災地住民から地元救援部隊に支援要請があってもFEMA支部職員の承認なしには活動できなくなった。そしてその直後に堤防が決壊し、ニューオリンズ市は水没し始めた。(B-①) <p>【地元の救援部隊の行動は正しかった】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・井戸平左衛門のときと違って、輸送や情報の伝達に時間がかかるわけではない。上が正しい判断をすれば多くの人を救えた。だから地元の救援部隊は悪くない。 ・きまりを破ることはできないし、指示がなければどうしてよいかわからず行動できない。だから救援部隊に責任はない。 <p>【地元の救援部隊は間違っていた】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元の人が助けやすいし、助けていたら1000人以上もなくならなかった。井戸さんとちがっている。(井戸さんは人の命のほうをきまりより大切にした。) ・今回被害を受けていたのはニューオリンズ市の人たちだけなので、平左衛門のように彼らを助けることは一部を優先することにはならない。だからきまりを破ってでも助けるべきだった。(B-②) ・きまりはみんなが平等に幸せであるためにあるはずのものであるから、一部の人が被害にあっているときはきまりをやぶってでも助けるべきだった。 ・きまりがあって、それをもとにみんなが動いているのならきまりは守るべきである。だから救援部隊に責任はない。 <p>(B-③)</p> <p>※各自で最終的な価値判断を行う。(B-④)</p>

そこで、同じように「人命かきまりか」の選択か問われた現代の社会問題の判断を通して、「どのような場合に人命が優先され、どのような場合にきまりが優先されるべきなのか」を吟味し、価値判断基準についてより精緻化していくことが、学習のねらいとなる。

V. 小学校第4学年「芋代官－井戸平左衛門の政治は正しかったのか？」の実践結果の分析

小学校第4学年「芋代官－井戸平左衛門の政治は正しかったのか？」の授業は島根県N小学校の4年1組(27名)において実践した。

実践の結果、子どもたちの自主的自立的な価値観形成からとらえて、以下のような成果がみられた。

1つは、評価の背後にある価値の違いについて、明確にできたことである。

第3次「井戸平左衛門の政治から考える」②では、まず、「井戸平左衛門の政治は正しかったのか、間違っていたのか」考えさせた。「正しい」は10人、「間違っている」は2人、「どちらとも言えない」が15人だった。この話し合いの記録を表2に示した。

【表2 「井戸平左衛門の政治は正しかったのか」の話し合いの記録①】※T=教師 C=子ども

発言者	発言内容
T	そこでみんなで考えてください。井戸さんのしたことは正しいのか。それとも間違っているのでしょうか。それともどちらともいえないのか。
T	正しいと思った人から意見を聞きましょう。なぜ正しいと思ったのですか。
C10	理由はお米やサツマイモを配っているからです。
C11	ウンカやイナゴでお米がとれなかったけど、幕府の許可はもらわなかったけど1週間に一度とかじゃなくて毎日お米をあげていたから正しかったと思います。
C12	井戸さんはとても悪いことはしていないと思います。理由は人を助けようとしていっしょうけんめいに餓死する人をなくそうと思って、勝手に米倉を開いたからです。それから薩摩の国からもいもを勝手にもちだしてまで人を助けようとしてました。間違っていないのに井戸さんを殺すなんて許したくないです。
C13	理由は井戸さんは幕府の許しを得ないまま勝手に米倉を開いたけど、それは井戸さんが人のため命のために開いたから悪くない。薩摩の国から勝手にサツマイモをもってきたのも命のためにしたことだからです。

Cs	同じです。
C14	私は人を助けるのは正しいと思います。いけないことはしたけれど、自分の命はどうでもいいとみんなのためにという気持ちで覚悟はできていたと思います。
C15	井戸さんは困っている人たちにお米をあげたから正しいと思います。
C16	井戸さんは村のみんなを救うために勝手にしたから正しいと思う。
C17	井戸さんは村の人々に平和をもたらしたいし、人々の命を守りたいし、自分の命は関係なく、 <u>人々の命を助けたいと考えた。だから正しいと思う。</u>
T	それでは間違っていると考えた人理由をいってください。
C18	理由は石見の人たちだけでなく <u>全国にそれをすればいいのにと考えたから</u> です。幕府に訴えて全日本でみんな同じようにするようにすればよかった。
C19	理由は幕府のゆるしを得れば、いつでも米倉を開けたのに、勝手に開けたから悪いと思う。
C20	島根県だけに恵んでいる。それに幕府のおかげで米をもらったのに、その幕府を裏切ったから悪い。さらに薩摩の国からさつまいもを盗むということも許されないと思う。
T	では「どちらともいえない。」の意見の人。
C21	井戸さんは村の人々のために一生懸命にやったけど、村の人たちも止めたことをやったからいいこともしたし悪いこともしたと思う。
Cs	賛成
C22	まずいいことをしたのは人々を助けたのは正しいと思う。だけど勝手に年貢を減らしたりサツマイモを持ち出したり、米倉を開いたりしたのはよくないと思う。勝手に米倉を開けたり、サツマイモを持ち出したりしたことは悪かったけど井戸さんのおかげで石見の人が餓死しなかったのは井戸さんのおかげだった。
C23	井戸さんは人を助けたけど米倉を勝手に開けたり、勝手にルールを作ったりしたからいけないと思う。
C24	井戸さんは米倉を勝手に開いたりサツマイモを村人に分けただけで石見の人の命を救ったからどちらともいえない。

「正しい」「間違っている」それぞれの意見の根拠を「人の命の重視」「きまりの重視」という価値から、整理したものが表3である。

【表3 井戸平左衛門の政治に対する価値判断①】

根拠判断	人の命	きまり
正しい	・自分の命を顧みず、石見の人の命を助けた。	・人の命は何よりも優先されるべき。
間違っている	・石見の人の命だけ助かった。 (他の地域ではたくさんの人が餓死した。)	・幕府のきまりのやぶるのよくない。 ・幕府は井戸さんを信頼して米900石を石見におくったのに、幕府の許可を得ないで米倉を開いたことは明らかにその信頼を裏切る行為だ。 ・薩摩の国からさつまいもを盗むということも許されない。

「正しい」とする子どもは、「人の命は何よりも優先させるべき」という立場に立っている。しかし「間違っている」は「それは石見の人の命だけが助かっているのであって、他の地域ではたくさんの人が餓死している。」と考える。さらに「きまり」については破ることは絶対許されない、という立場に立っていることがわかる。この話し合いを通して、子どもたちは「評価が異なるのはそれぞれ何を大切にするのが、異なるからだ」と価値判断の違いについて、気づくことができた。

2つめは、明らかになった価値判断について批判、吟味することで、価値判断の精緻化がなされたことである。互いの価値判断に対して批判・吟味を行った授業記録を示したものが表4である。

【表4 価値判断に対する批判・吟味の過程】

発言者	発言内容
T	それではそれぞれの意見に対して何か意見はありませんか。
C25	言いたいことは2つあって、米倉を開けるのに許可をもらうのには時間がかかるし、「島根県だけ助かって」というけど、 <u>代官は石見代官だから(人々の命を助けるのは)自分の国だけでいいんじゃないかな。岡山県のことは岡山県の代官がすればいい。</u>
C26	<u>薩摩の国はだめっていったけど、作っている人がいいと言ってくれたんだからいいと思う。</u> それからS25さんと同じで石見の国の代官だから石見の国のことだけすればいいし、他の国にも他の代官がいるんだから、その地域のことはその地域の代官
C27	

C28	がすればいい。 <u>人の命を優先するなら全国の人たちの命を優先すればいいと思う。</u>
C29	ぼくもS28さんと同じで全国的にすれば、島根県の人だって助かったと思うし、幕府の言うことは守らないといけないし、 <u>最後に処罰を与えられるんならそれは悪いことをしていたってことになる。</u>
C30	S29さんに質問なんだけど、日本全国にするっていつているけど誰がするんですか。
C29	意味がわからんのだけど
T	全国的に年貢を集めた米倉を開いたらどうなるんだろうね。
Cs	バーゲンみたいになる。
C30	米倉を開いてそれを困っている人たち全部に配るのも大変。
T	米倉って全部開いていいの？
C31	幕府がお金のために集めたお米を全部配っても、日本全国に住む人は多いから全部の人にいきわたらないと思う。
C32	<u>全国でしたらすぐ幕府にばれてしまう。</u>
T	ばれたらまずいの？
C33	<u>全国の人に配ったら石見の人が死んでしまう。</u>
C34	する気があったら全国の人にしていたと思う。
C35	ぼくは全国で米倉を開いていたほうがよかったと思う。 <u>一人で勝手に米倉を開くのではなくてみんなで相談して決めてから米倉を開いたほうがよかった。</u>
C36	それはみんなを助けたかっと思うけど、 <u>一斉に米倉を開いたらばれてしまう。</u> だから石見地方は石見地方のことだけしておけばいい。
C37	<u>それぞれの地域にそれぞれの代官がいるんだからそれぞれの代官が責任をとればいいと思う。</u>
C40	<u>多分西日本の他の代官たちは処罰を受けるのがこわかったと思う。</u>

この話し合いを通して、「人の命の重視」と「きまり」のとらえ方が精緻化されてきた。それを整理したものが表5である。

「人の命の優先」についてはどの範囲の人の命までを優先するのか、争点が明確となってきた。「正しい」派は「石見地方の人の命が助かれればよかった」とする。

「間違っている」派は「石見代官だけきまりを破って石見の人だけ助かるのはよくない」と考える。また「きまり」については、「正しい」派は、「当事者がいいというならいい」「ばれないようにする」など「きまり」を完全に無視した意見、すなわち、一法と実態との乖

離が生じることはいたし方ないことと考えて、実態と乖離した法は、できるだけ使わないで、社会内の問題解決は他の手段によって行っていく—という考え方である。

反面「間違っている」派は「処罰を与えられたならそれは悪いことをしていたことである」と、きまりを絶対化する態度をとる反面、「みんなで相談して決めてから」のように話し合っただけの方法やルールを決める大切さについて気づいている。

【表5 井戸平左衛門の政治に対する価値判断②】

根拠 判断	人の命	きまり
正しい	<ul style="list-style-type: none"> ・石見代官は石見の代官だから石見の人を助ければいい。 ・全国の人に配ったら石見の人が死んでしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者(芋を作っている人)がいいというならいい。 ・ばれたら罰せられるからばれないようにする。 ・他の代官は処罰を受けるのがこわかっただけ。
間違っている	<ul style="list-style-type: none"> ・人の命を優先するなら全国の人たちの命を優先しなければならない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで相談して決めてから米倉を開いたほうがよかった。 ・処罰を与えられたならそれは悪いことをしていたことである。

このように、話し合いを通して子どもたちは「人の命」や「きまり」という抽象的な価値について、実際の生活や状況にあてはめ、「どのくらいの範囲」で「どの程度」重視すべきなのか、具体化し、より精緻化することができた。

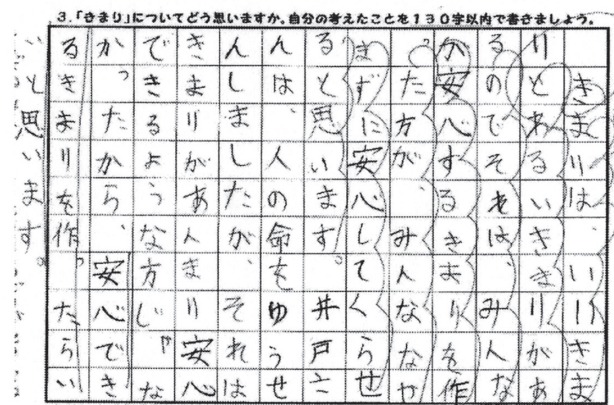
3つめは、このように相反する価値判断を調整する必要性に気付くことができた点である。

第4次ではハリケーン・カトリーナの救援活動について、「地元からの救援要請があったにも関わらず、上からの指示がなかったため救援行動をとらなかった地元の救援部隊の行動は、正しかったのか間違っていたのか」判断する学習を行った。「地元の救援部隊は間違っていた」とする子どもは、「きまりをやぶって地元の人みんなで助ければよかった」「地元の人が助けやすいし、助けていたら1000人以上も亡くならなかった。井戸さんとちがっている(井戸さんは人の命のほうをきまりより大切にした)」「きまりがあっても人の命を優先すべき」「どうして人を助けなくてほったらかしのままにするのか」と人の命を優先している。反面「正し

い」あるいは「仕方ない」とする子どもは、「(地元の人は)助けたいけど指示をされていないから、助けられない。指示があれば1000人以上も死ぬことはなかったと思う」「上が指示しないとみんなも指示できない」「かえって、被害を広げたり、隊員自身も命の危険にさらされるかもしれない」等、全体的な状況が把握できないまま、自己判断で救援にあたることの難しさを指摘していた。

このような話し合いを通して、子どもは、人の命を守るためのしくみとしてきまりが必要であり、そのためには、状況に適したよいきまりをつくる必要があることを実感できた。子どものきまりに対する意見の一部を示したものが資料1である。

【資料1 きまりに対する子どもの意見】



以上のように、子どもは①評価の背後にある価値の認識、②相互批判を通じた価値の具体化、精緻化、③価値の調整という3点において、価値判断を批判的に分析し・吟味し再構成を図ろうとする態度、すなわち自主的自立的な価値観を形成できたのではないかと考える。

VI. 研究の成果と課題

本研究では、人物に対する評価を吟味・分析することで子どもの自立的な価値観形成をうながす小学校社会科授業の構成を、第4学年の単元開発を通して明らかにした。本研究の成果としては、下記の点を挙げるができる。

第一に、小学校段階において態度形成に陥りがちであった人物学習において、自立的な価値観形成を保障する授業構成を提案したことである。

第二は、上記の授業構成原理に基づく単元設定や単元構成のあり方を、第4学年の小単元「芋代官-井戸平左衛門の政治は正しかったのか?」の開発を通して明

らかにしたことである。

小学校社会科における人物学習は、社会の維持・発展に寄与する態度・行動の育成を目指して特定の価値観を強調するものになりがちである。本研究は、小学校社会科の人物学習において、自立的な価値観形成をめざす授業を提案したという点に意義があると言える。

今後は、このような授業構成が今回取り上げたような人物学習以外の教材にも応用可能であるか、判断の背後にあるどのような価値や規範を取り上げることが教育的に求められるかを明らかにすることが課題となる。

【引用文献】

文部科学省（2008） 小学校学習指導要領解説 社会科編，p. 19，東洋館出版
小原友行（1987）意思決定力を育成する歴史授業構成

-『人物学習』改善の視点を中心に-，史学研究 177号

服部一秀（2012） 中等一貫歴史カリキュラムにおける歴史文化探究力の育成-ザクセン州ギムナジウムの歴史科（第5～12学年）の場合，全国社会科教育学会『社会科研究』第76号，pp. 1-10

溝口和宏（2012） 開かれた価値観形成をめざす歴史教育の論理と方法-価値的知識の成長を図る四象限モデルの検討を通して-，全国社会科教育学会『社会科研究』第77号，pp. 1-10

溝口和宏（2002） 開かれた価値観形成をめざす社会科教育-『意思決定』主義社会科の継承と革新-全国社会科教育学会『社会科研究』第56号，pp. 31-40，

堤 未果（2008） ルポ 貧困大国アメリカ，岩波新書，pp. 43-44

The principles of structuring lesson plan of an elementary school in order to foster values formation.

On the basic of developing a tentative lesson plan for the 4th grade in an elementary school “Analyzing ‘Ido-Heizaemon’ s Politics ”

Michiko Kamita

*Department of Primary Education, Faculty of Education, Okayama University of Science
1-1 Ridai-cho, Kita-ku, Okayama 700-0005*

(Received October 17, 2018; accepted December 6, 2018)

This study developed the lesson plan of the social studies of an elementary school focused on promoting the formation of children's value sense. In this lesson, children examine and analyze the evaluation for the historical person. A citizen living in a democratic society must acquire the knowledge, skill and will for the decision making as a responsible individual against the one-sided socialization. Previous studies have proposed various ways of fostering values formation. But, in the case of an elementary school in Japan, still now, a teacher instills knowledge in children one-sidedly in order to give them indoctrination. Such tendency is seen in the elementary school third and fourth grades of elementary school, especially in the lesson about the historical person who worked for the development of the local society. In this study I clarified the way of making lesson plan to promoting the formation of children's value sense through finding the differences between the evaluation in the past and today of the historical person who devoted oneself for the other people of the local society and analyzing and examining the value sense based on such evaluation. Finally, I made the lesson plan of the 4th grade social studies class “Analyzing Ido-Heizaemon's Politics.”

Key words:

fostering values formation, evaluation of the person, lesson plan, the person who rendered development of the area, Ido-Heizaemon, social studies lesson in elementary school

